

英語低学力の生徒に対する効果的学習方法について  
ー サイトトランスレーションとリスニングトランスレーションの活用法 ー

奥羽 充規\*・福元 広二\*\*

An Effective Learning Method for Slow English Learners

OKUBA Atsunori\*, FUKUMOTO Hiroji\*\*

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第7巻 第1号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.7 / No.1

平成 22 年 6 月 30 日 発行

June 30, 2010

# 英語低学力の生徒に対する効果的学習方法について

## ー サイトトランスレーションとリスニングトランスレーションの活用法 ー

奥羽 充規\*・福元 広二\*\*

An Effective Learning Method for Slow English Learners

OKUBA Atsunori\*, FUKUMOTO Hiroji\*\*

キーワード：英語学習，言語学習方法 サイトトランスレーション，リスニングトランスレーション  
Key Words：English learning, language learning method, Sight Translation, Listening Translation

### 0. はじめに

文部科学省による「英語が使える日本人育成計画」のプロジェクトが打ち出されてから久しく時間が経過している。文部科学省はそのプロジェクトの一環として、全国の多くの高等学校にSEL- hi校指定をし、各学校における独自の取り組みを通して英語の実践的コミュニケーション能力の育成を図り、生徒たちにこれからの時代に求められる英語力の育成を図り、その研究実践結果の報告会を毎年3月に開いてきたのは周知の事実である。そのSEL- hiプロジェクトは終了したのだが、そのプロジェクトの参加校の多くは、主に英語学習や指導を重点的に行ってきた学校や、大学入試を前提にした進学高校、そして学力的に高い生徒が集まったエリート校であることが多かった。そのような中、文部科学省は新学習指導要領にて、外国語科改訂の要点の中に高等学校の英語の授業は英語で授業を行うのを基本にすることを明記しているが、それは本当に全国のすべての学校における実態に合っていると言えるのであろうか。SEL- hiプロジェクトにおいて一部の高学力の生徒に対して有効であった方法が、低学力の生徒の英語学習や指導に関して通用するか否かについては今後の研究実践が待たれるところであろう。

本論文では、そのような問いに対する1つの試論として、広島県の進学校であり、平成16年～平成18年までの3年間SEL- hiに指定されていた広島市立舟入高等学校で行われていた実践的な英語学習方法の幾つかを取り上げ、それが低学力の生徒にも有効であるかを考察する。調査を行ったのはI高校で、およそ半年間の授業内での実践を通して、生徒たちの反応を調査した結果、多くの生徒がその英語学習方法に刺激を受け、言語習得の実感を得た。I高校での実践方法は舟入高校とまったく同じ方法を使用したわけではないが、高学力の生徒に使用された英語学習の方法の応用的な方法で低学力の生徒にも有効であることを本論文で述べてみたい。

まず、1節では、舟入高等学校で使用された指導法の中で、サイトトランスレーションとリスニングトランスレーションを取り上げ、この方法について概観する。次に2節では、実際に舟入高等学校で実践された方法について紹介する。そして、3節では、I高校の1年生の授業の中で行った方法

---

\* 鳥取県立鳥取東高等学校

\*\* 鳥取大学地域学部地域文化学科

について説明し、4節では、I 高校における生徒たちの英語学習に関するアンケート結果について述べ、5節はまとめである。

## 1. サイトトランスレーションとリスニングトランスレーションについて

まず、広島市立舟入高等学校で行われていた実践的な英語学習方法の中から、サイトトランスレーションとリスニングトランスレーションを取り上げ、これらはどのようなものであるのかについて見ていく。

サイトトランスレーションとは、もともと言語学習用の用語ではなく、主に通訳で使われる言葉である。また、それは時に「原稿訳読」あるいは「視訳」<sup>1</sup>とも呼ばれる通訳方法である。小松 (2005:84) によれば、「サイトトランスレーションとは、スピーカーがあらかじめ用意された原稿を読む場合の通訳である」としている。また、水野 (2008:90) では、「通訳の極めつけがサイトトランスレーションです。通訳を使う立場の人は、『原稿を渡したから簡単でしょう』と言います。しかし、これは同時通訳より難しい通訳技法です」と言及している。しかしながら、小松 (2005:84) は同時にサイトトランスレーションのもう1つの意義として次のように述べている。「サイトラにはもう1つの意義がある。それは通訳者の訓練の過程としての意義である。言語転換という知的作業の基礎訓練として、サイトラは大きな役割を果たすことができる。」ここで、小松はサイトトランスレーションを通訳で行う作業であるとしながら、通訳としての訓練法、更には言語転換という知的作業の基礎訓練としてのサイトトランスレーションという側面について言及しているのである。

一方、リスニングトランスレーションという言葉については、基本的に文字通りの意味としての用語であり、通訳の用語として存在しているわけではない。通訳の分類上では、逐語通訳や同時通訳といったものがそれにあたると考えられるが、どちらにしても聞いた内容を別の言語に通訳していくので、リスニングトランスレーションという枠組みを作ってはいない。また、リスニングトランスレーションという枠組みをサイトトランスレーションを使用した音読活動の1つとしての使用する授業実践例<sup>2</sup>も存在し、用語としての周知は必ずしもされているのではないと言える。

本論文においては、サイトトランスレーションとリスニングトランスレーションの両用語ともに、文字通りの意味や通訳上の技法に関する意味ではなく、英語の授業における音読を伴った言語転換の訓練方法として、言語学習上における意味で主に使用する。

## 2. 広島市立舟入高等学校の実践

ここでは、本論文で取り扱うサイトトランスレーションとリスニングトランスレーションを舟入高等学校ではどのように実践してきたかを説明していく。

広島市立舟入高等学校は、平成16年～平成18年までの3年間SEL-hi校指定を受け、『英語で議論できる効果的な発信能力を育成するためのステップアップ・プログラムの研究開発』を研究タイトルとして掲げた。その研究内容は以下の通りの3つ<sup>3</sup>である。

研究内容1：ライティングからスピーキングへの移行を図る指導法の研究

研究内容2：スピーキングから議論活動への移行を図る指導法の研究

研究内容3：指導評価シラバスの開発

舟入高校では、各研究の実践を行う際に、その指導段階を次の4段階に類型化<sup>4</sup>、それぞれの型

に応じた学習活動を行った。

- ①従来型 (Convention Type)
- ②トレーニング型 (Training Type)
- ③イベント型 (Event Type)
- ④国際交流型 (International Type)

そして、そのような類型化を通じて明らかになったことを次のように述べている。

「英語学習も同様に、従来行われてきた訳読，多読，精読，速読，文法，語彙暗記など「①英語の基礎体力」をつける活動から，いきなりディベートやディスカッションなどの「③実践的コミュニケーション」へと移行しても，やはり無理があることは否定できない。「①基礎」から「③実践」への橋渡しとなる「②トレーニング」が必要である。」

更に指導段階の種類のうちの2つ目のトレーニングの段階で，舟入高校はその指導技法を①音読，②暗誦，③即興の3つに分類し，具体的な活動内容を明確化した。そして，その指導技法の2つ目の段階の暗誦の段階に「サイトトランスレーション」と「リスニングトランスレーション」がある。このカリキュラムにおいては1，2年次にサイトトランスレーション，3年次にリスニングトランスレーションを配置している。

以下がその実践手順<sup>5</sup>である。

● サイトトランスレーション

- ①CDを用いてモデルリーディングを聞かせる。
- ②センスユニットごとの和文英訳を全体で確認する。
- ③プリントを半分に折，英文のみを見てスピーディに口頭和訳を行う。
- ③ペアでプリントを交換し，一人がサイトトランスレーションを行う。  
もう一人は口頭和訳の間違いに下線を引いたり，ヒントを与えながら，相手の和訳を確認する。
- ④プリントを半分に折り，日本語のみを見て英文のリプロダクションを行う。

● リスニングトランスレーション2<sub>a</sub> (英語→日本語)

- ①音読，訳読または訳先渡しを通して教科書の例文や本文に習熟させておく。
- ②教師は通訳する部分（と目標時間）を生徒に指示する。
- ③ペアを作り，「読み手」と「聞き手」を決める。
- ④「読み手」は英文を見ながら，少しずつ音読をして「訳し手」に聞かせる。
- ⑤「訳し手」は「読み手」が読んだ部分までを日本語になおす。
- ⑥「読み手」は，「訳し手」が訳せなかったり間違ったりした場合には，「訳し手」を助けるように繰り返して読んだり，パラフレーズしたりする。
- ⑦一通り終了したら，「読み手」と「訳し手」を交代する。
- ⑧ペアが2人とも終了したら着席する。

● リスニングトランスレーション2β (日本語→英語)

- ①音読, 訳読または訳先渡しを通して教科書の例文や本文にかなり習熟させておく。
- ②ペアを作り, 「読み手」と「訳し手」を決める。
- ③「読み手」は英文を見ながら, 少しずつ日本語訳をして「話し手」に聞かせる。
- ④「訳し手」は「読み手」が告げた部分までを英語になおす。
- ⑤「読み手」は, 「訳し手」が英語になおせなかったり間違ったりした場合には, 「訳し手」を助けるように日本語を繰り返して告げたり, パラフレーズしたりする。
- ⑥一通り終了したり, 「読み手」と「訳し手」を交代する。
- ⑦ペアが二人とも終了したら着席する。

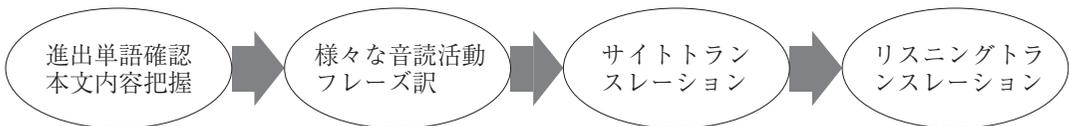
また, 舟入高校の取り組みでは, 1, 2年次におけるサイトトランスレーションを, 徹底して個人個人の活動として実施している。もちろんペアワーク等を行っているのであるが, そこでは, 正確さの確認作業であり基本的に個人の定着度の振り返りをペアで行うという意味合いが強いと言える。おそらく, 生徒の発音の正確性という点を考慮し, ある程度その正確性が高くなっているであろう3年次からリスニングトランスレーションを行うという徹底した仕組みである。実際, 静(2009:19)においても, 「正確さのない音読やシャドウイングは百害あって一利なし」とあるが, その観点から3年計画の中でリスニングトランスレーションの配置を3年目にしたとも考えられる。

### 3. I 高等学校における実践例

平成21年9月～平成22年2月までの半年間, I 高等学校1年生の英語Iの授業において, 英語Iの教科書を言語材料としてサイトトランスレーションおよびリスニングトランスレーションを利用した音読活動を授業の中で行った。I 高等学校は, 1学年およそ100人前後の規模の学校であり, その生徒の多くは英語に対して苦手意識を持ち, 英語学習に意欲的に取り組む生徒は決して多くない。以下にその実践内容と手順について説明する。

担当学年：1学年	使用教科書：All Aboard I 東京書籍
担当生徒数：85名（100名中）	授業時間数：週3時間
実践期間：平成21年9月～平成22年2月	

ーサイトトランスレーション・リスニングトランスレーションへの流れー



#### ○サイトトランスレーション

##### First Step 英語→日本語

- ①音読, 訳読を通して教科書の例文や本文に習熟させておく。
- ②教師が前もって準備したフレーズ単位に教科書の本文を区切ったプリントを配布して, 英文和訳をさせる。

- ③フレーズごとの和訳を全体で確認し、プリントを見ながら教師が指示したフレーズを口頭和訳する。
- ④ペアでプリントを見ながら、片方が読んだ英語をもう一人は口頭和訳する。最初は訳を見ながら行い、2回目以降は訳を見ずに英文だけで口頭和訳していく。その際に、英語の読み手は相手の日本語訳を確認してやる。
- ⑤全体で、英文のみを見ながら教師が読んだフレーズ単位の英語を和訳していく。
- ⑥フレーズ単位の英文を見て、和訳を書いていく。

## Second Step 日本語→英語

- ⑦ペアでプリントを見ながら、片方が読んだ日本語をもう一人は英語に直していく。最初は英語を見ながら行う。2回目以降は本文を見ずに日本語だけで英語にしていく。その際に、日本語の読み手は相手の英語を確認して行う。
- ⑧全体で、日本語を見ながら教師が読んだ日本語を英語にしていく。
- ⑨フレーズ単位の日本語を見て、英語に直していく。

## ○リスニングトランスレーション

- ①サイトトランスレーションで使用したプリントのフレーズ単位の英語を教師が読み、全体でそれを聞いて口頭和訳していく。
- ②ペアを作り、片方が英語を読み、もう一人は聞いた英語を口頭和訳していく。
- ③フレーズ単位の日本語を教師が読み、全体でそれを聞いて英語に口頭英訳していく。
- ④ペアを作り、片方が日本語を読み、もう一人は聞いた英語を口頭英訳していく。
- ⑤④の活動の延長としてメトロノーム等を使用して、リズムを作って行う。
- ⑥フレーズ単位をより長い単位に、最終的には文単位にまで伸ばして口頭英訳を行う。
- ⑦教師が読んだ日本語を、英語に訳して書いていく。

I 高校で行った実践方法の特徴は、サイトトランスレーションをリスニングトランスレーションの活動を行うための前段階として扱っていることである。すなわち、サイトトランスレーションの活動を行うことで、より本文への理解や英文の定着を図り、次のリスニングトランスレーションを行うための土台作りを図っている。この一連の活動を通して、生徒たちは授業内において何度も本文に触れるとともに、英語の単語、フレーズ、一文に関して日本語→英語、英語→日本語への変換作業を繰り返し、自分自身の脳内において英語と日本語の一致作業を繰り返し行うことになる。これは英語の語順や、文法項目などの英語の構造理解を必ずしも前もって求めておらず、英語が苦手な生徒にも受け入れやすい活動であると考えられる。その結果については、次の章で述べるのであるが、実際、多くの生徒にとって多少の難易度はあるものの、授業のあとの達成感と充実感を感じることのできるものであったようである。また、リスニングトランスレーションの最後の締めくくりとして、こちらが読んだ日本語訳を英語にして書かせる点も重要となる。もともと、英語に自信のなかった生徒にとって「英語に訳せる」というのは非常に魅力的であるが、口に出せるものが書けないというのは一層悔しく感じられるものである。実際、その筆記小テスト前の本文練習の宿題の提出率が非常に高かったことからそれは明らかである。

#### 4. I 高等学校におけるアンケート結果について

I 高校における授業実践の成果を測るため、2月の授業終了時に生徒にアンケート用紙を配布し、その実践についての成果と生徒自身の実感を調査した。また、2009年4月時における英語の意識アンケートの結果も生徒たちの英語に対する実態に関するデータを知るためのパイロット調査として行っているため、その結果についても合わせて報告したい。

表1は2009年4月時の1年生の生徒の英語に対する意識調査を説明したものであり、表2は2010年2月における英語の音読活動を通じた英語学習への感想についての実態を説明したものである。

●表1 2009年4月 英語意識アンケート

対象人数：85名（1年生）

Q.1 英語は好きですか。				
	1 とても好き	2 好き	3 あまり好きではない	4 嫌い
数値	3	10	37	35
割合	4%	12%	44%	41%
Q.2 英語が好きなの理由は何ですか。(Q1で1, 2を回答した生徒のみ) 複数回答可				
	1 授業が楽しいから	2 英語に興味があるから	3 海外に行きたいから	4 成績がいいから
数値	1	4	5	10
割合	5%	20%	31%	38%
Q.3 英語が好きではない理由は何ですか。(Q1で3, 4を回答した生徒のみ) 複数回答可				
	1 授業がつまらないから	2 授業がわからないから	3 英語が必要ないから	4 成績が悪いから
数値	19	32	33	40
割合	18%	30%	31%	38%

●表2 2010年2月 英語授業アンケート<sup>6</sup>(音読活動について)

対象人数：76名（1年生）

Q.1 この音読練習は自分が英語を理解するのに役立ちましたか				
	1 かなり役にたった	2 少しは役にたった	3 あまり役に立たなかった	4 全然立たなかった
	29	45	2	0
	38%	59%	3%	0%
Q.2 この音読練習を通して、英語を読むのが上達したと思いますか。				
	1 かなり上達した	2 少し上達した	3 あまり上達しなかった	4 全然上達しなかった
	11	59	5	1
	14%	78%	7%	1%
Q.3 音読の授業で、やったという達成感を持つことができましたか。				
	1 かなり持てた	2 少しは持てた	3 あまり持てなかった	4 全然持てなかった
	15	58	3	0
	20%	76%	4%	0%

Q.4 この音読練習で英語学習を楽しいと思える時はありましたか。			
1 かなりあった	2 少しはあった	3 あまりなかった	4 全然なかった
18	46	10	2
24%	61%	3%	3%

表1にあるように、85名中72名が英語が好きではないと答えている。その理由として、「授業がつまらない」、「授業がわからない」を51名の生徒が選択しており、生徒にとって英語嫌いになる理由としていかに授業がその要因として関わっているかを示す結果となっている。また、英語が好きな生徒の理由として「授業が楽しいから」を理由として選んでいる生徒はわずか1名しかおらず、それまでの英語の授業が生徒にとっての興味関心を抱いたり何らかの達成感を得られるような場所ではなかったことがわかる。

一方、表2は半年間にわたって行った音読活動、具体的には特にサイトトランスレーション・リスニングトランスレーションを使用した授業についてのアンケートの結果である。Q4以外の項目で実に90パーセント以上の生徒が1, 2を選択しており、生徒の達成感、満足感を非常に満足させる実践方法であったということがわかる。また、具体的にどのように感じたかについて生徒が具体的に書いたコメントに関しては、その中のいくつかには授業中の実践の中でどのように自分が感じていたかを詳しく書いている記述7もあり、その効果のほどを表しているといえる。特に、アンケートのQ1の質問項目の答えで1を答えた生徒は40パーセント弱もいることは、英語が苦手な生徒にとって、サイトトランスレーション・リスニングトランスレーション音読の活動は苦手な英語を理解するのにとても有効であることを表している。また、Q3の生徒の達成感を尋ねる質問事項では実に96パーセントの生徒（一人を除いて）がこの音読活動のあとに達成感を感じたと答えている。このことから、この音読活動について生徒は確実な達成感を認識しているといえる。

## 5. おわりに

本論文では、英語に対して苦手意識を持っている生徒や英語低学力の生徒に対する動機付けを伴う効果的な学習方法として、サイトトランスレーションとリスニングトランスレーションが有効であることを提案した。広島市立舟入高等学校の方法のように、学年別にその活動を分けるのではなく、今回はそれらを一連の活動として使用することで、生徒の英語理解の実感と達成感を与えることができた。実際に、アンケート結果を見ても大多数の生徒がその音読活動に対して何らかの成果を感じており、英語低学力層の生徒にとっても非常に魅力的であり、その動機を引き出す授業実践方法であることが証明できたといえる。4月当初と2月の終わりに同レベルのテストを課すなど具体的に生徒のどの力が伸びてきたかについてのデータを示し、学力レベルでの伸長についての数値的な検証は今後の課題としたい。しかしながら、本論文で取り上げたサイトトランスレーションとリスニングトランスレーションは英語に対して苦手意識を持ち、これまで英語学習に積極的ではなかった生徒がその動機を持つことができる授業実践のあり方として今後とも注目すべき方法であることは間違いない。

## 注

- <sup>1</sup> 水野 (2002:20) 参照
- <sup>2</sup> 平成16年度, 岐阜県立長良高等学校 石神政幸氏による実践報告より。  
<http://www.shinko-keirin.co.jp/koei/english/jissen/15.html>を参照 「教科学習情報 英語授業実践記録」
- <sup>3</sup> 『広島市立舟入高等学校 研究開発実施報告書』 p. 3
- <sup>4</sup> 『広島市立舟入高等学校 研究開発実施報告書』 p.23
- <sup>5</sup> 『広島市立舟入高等学校 研究開発実施報告書』 pp.96-97, pp.108-109
- <sup>6</sup> 授業内における音読活動に関する生徒の感想も同時にとっているのでここに載せる。
- ・リズムで英語の本文の1部を覚える授業は, 皆がすごく覚えていたのでたくさん取り入れてほしい。
  - ・覚えやすい授業で, たとえ覚えていなかったとしても楽しい授業だった。
  - ・音読練習をした後は, 自然に頭に入っていました。
  - ・リズムに合わせて音読するのは, 楽しく覚えられるし, そのあともずっと頭に残るので良いと思った。
  - ・メトロノームを使った読み練習は楽しかった。また, ペアの音読練習も楽しかった。
  - ・1つ1つのやる意味を教えてくださいましたので頑張れた。
  - ・文章の作り方がまだ分からない。
  - ・音読を繰り返しているうちに, 知らず知らずに自分の脳内に内容が保存されていったんだということを感じた。一瞬戸惑っても, 何度もやったおかげか, 直ぐに答えを出すことができている。効果絶大だと再度実感しました。
  - ・苦手で嫌だった英語が, ちゃんと向き合うことで少し好きになれた。
  - ・発音練習とともに, 書き練習があったので書けるようになった単語が増えた気がする。
  - ・リズムで文を覚える練習がとても印象深かった。テストのときに思い出しやすかった。
  - ・音に合わせて読む活動は, 楽しんで覚えるのですごく良かったです。
  - ・先生の授業にはムダな事が1つもなく, 本当に自分がやればそれだけの結果が出る勉強でした。わかりやすく目標をしっかりと見つめることが出来たと思う。
  - ・英語だけを読む, 日本語だけを読むというように逃げている自分がいた気がする。
  - ・声をだして読むことで英語がとても覚えやすくなった。
  - ・楽しく単語を覚えることができた。
  - ・授業が楽しくて, 英語が得意ではないけど, 好きになりました。注3を参照
- <sup>7</sup> 注6を参照

## 参考文献

- 小松達也 (2005) 『通訳の技術』 研究社
- 静哲人 (2009) 『英語授業の心・技・体』 研究社
- 水野真木子 (2008) 『コミュニティー通訳入門』 大阪教育図書
- 水野真木子他 (2002) 『グローバル時代の通訳』 三修社
- 広島市立舟入高等学校 (編) (2007) 『平成18年度 広島市立舟入高等学校 スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール研究開発実施報告書』

(2010年5月24日受付, 2010年5月24日受理)